

日本イーライリリー ヤングケアラープロジェクト

対談レポート ～子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト（YCARP）～

2022 年から始まった、日本イーライリリーによるヤングケアラーを取り巻く環境改善に向けた取り組み。2023 年、その活動をさらに進化させるべく、ヤングケアラー支援を行う様々な団体と情報交換や連携を進めています。

ヤングケアラー支援の課題や注意点とは？その中で企業が果たせる役割とは？社員がお聞きし、気づきと学びにつながった対話の一部をご紹介します。

—今回お話を伺うのは、立命館大学人間科学研究所内に設置された研究プロジェクト「子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト（YCARP：Young Carers Action Research Project）」の皆さんです。家族社会学を専門とされる斎藤真緒教授やケアラー経験のある研究員の方々を発起人とし活動を進められています。

●お話を伺った方々●

子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト

立命館大学産業社会学部教授 斎藤真緒さん

立命館大学衣笠総合研究機構人間科学研究所

補助研究員 河西優さん、武石卓也さん

北海道大学大学院 博士後期課程 亀山裕樹さん

—まずは YCARP の概要と主な活動をお聞かせいただけますか。

2021 年 9 月に発足した団体で、「子ども・若者ケアラー」を対象に、「当事者の声を反映させる」ことを目的として研究と実践の両輪で進めています。現在メインとなっている活動は、当事者やサポーターが月 1 回オンラインで開催している「定例ミーティング」です。そこで様々なケアラーからの話を聞き、ケアの多様さを知って支援策を考えていくことが活動のベースとなっています。また、当事者が交流できるキャンプや、医療や教育など様々な専門家にヒントをいただく支援者向け講座も開催しています。

—ヤングケアラーについては、社会の認知不足はもちろん、自身がヤングケアラーという自覚がない子どもや若者が存在し、そうしたケアラーにどうやってアプローチするかが課題の 1 つだと感じています。YCARP では、どのようなアプローチの工夫をなさっていますか？

我々の作成した啓発パンフレットでは、家事や費やした時間などケアの内容や程度でヤングケアラーを説明するのではなく、

「ケアと自分の生活のバランスを取るのが難しい」、「自分がいないと家庭がまわらない」といった、当事者の実態に基づいたリアルな感覚で説明するようにしています。この方法なら、自覚のないケアラーに「私と重なる部分がある」と感じさせ、気づきを与える可能性があります。



（出典）「子ども・若者ケアラーについて知っていますか？」

パンフレット <https://y-carp.wixsite.com/my-site>

ただ、ヤングケアラーは多様なので、自分がケアラーだと認識したくないという子どももいます。自覚を促すというよりも、大変なことを頑張っているのだから、負担を減らす方法を一緒に考えようという方向でアプローチすることが大切だと思います。

—なるほど。本人がヤングケアラーであると認識すること自体よりも、一緒に考えてくれる大人が近くにいることを知ってもらうのが最初のステップかもしれませんね。

「声にならない声がある」というのが大きなポイントです。ヤングケアラーは、自分のことを後回しにする傾向があるため、支援ニーズを探ろうと希望を尋ねてもクリアな回答が得られないかもしれません。諦めなくていいということを理解し、自分の希望を改めて考えられる場が必要です。ヤングケアラーを支える社会の側も、かわいそうと一面的に判断するのではなく、ヤングケアラーの多面的な、ゆらぎのある気持ちを受け止め、寄り添う必要があります。

—受け入れる姿勢を持って聞かないと、せっかくヤングケアラーとつながっても、心の内を話してもらえないかもしれないということですね。相談を受ける側のスキルも求められるのだと感じます。ヤングケアラーの話を書く際には、どんな心掛けが大切だと思いますか？

聞き手が評価しないことです。自らの経験をポジティブに受け止められるケアラーもいれば、ネガティブな思いを持つケアラーもいます。また、交流イベントを開催するにしても、この場でちょっと話したかっただけというケアラーもいますので、つながることを強制しないのも一つの方法です。場のデザインに気を付けることが必要ですね。

—つながる場は提供するけれども、つながることは強制するものではないと。ここに居るだけで安心感を持ってもらえるのなら、それだけでもいいですよということですね。

若者ケアラーからは、他のケアラーとケアに関する話もしたいが、ケアに関係のない雑談もしたいという希望を聞きます。ケアラーはケアのことだけ考えている訳ではなく、楽しみたい気持ちもあるのです。

—ケアのことを喋らなくてはならないという心の負担を小さくして、雑談でいいですよとなると気軽に参加できるのかもしれませんがね。他にはどのような支援が必要とされているのでしょうか？

今、様々な自治体が相談窓口を開設していますが、相談しても一旦は経過を見るケースもあり、福祉サービスにつながることはまだ少ないと聞いています。また、つながったとしても、ケアラーによるケアは継続します。そうすると、子どもが若者になり就職先を探す時や、社会人になった時、あるいは出産・子育てを行う時など、ライフステージに応じて様々な課題が生じてきます。

家事サービス提供など、ヤングケアラーが今困っている問題を取り除くことで、子どもが自分の時間を確保できることは大切です。ただ、それだけではなく、ヤングケアラーが自分の意思で自分の人生を歩むためのサポート、例えば居場所や住まいに関する支援、キャリア支援も必要だと思います。

—ケアラーが自分で自分の人生を歩んで、自立していくことが重要なのですね。日本イーライリリーでは、2022年から認知啓発を中心に取り組んでいますが、さらに良いものにしていくため、社内で議論を重ねています。YCARPの皆さんから見たご期待を教えてくださいませんか？

ヤングケアラー支援が進んでいるイギリスでは、ヤングケアラーが不適切なケアを行うことを防ぐための研究が進んでいます。情報を十分に持ち得ない子どもがケアを主に担う状況に対して、患者さんをどう支えていくかの課題があります。

一方、医療従事者の中にも、まだまだヤングケアラーを認知していない方がいらっしゃるのではないかと思います。ヤングケアラーが置かれている状況について、医療機関だからこそ気付けることも多いはず。製薬企業だからこそアプローチできる医療機関や薬局などへ当事者の声を届け、認知を広げてほしいですね。

—ありがとうございました。

- 立命館大学人間科学研究所内 子ども・若者ケアラーの声を届けようプロジェクト
(<https://y-carp.wixsite.com/my-site>)

2023年9月
日本イーライリリー株式会社